

50代



被災地でお手伝いを
したいというのが
一番の動機だった。

よこやま よしの氏

1990年富山医科薬科大学卒。
同大第二外科の医局人事で富
山県などの病院に勤務し、木
戸病院外科部長を経て2015
年10月、常盤病院に就任。主
任外科部長を務める。日本消
化器学会専門医、日本大腸
肛門病学会専門医など。

もあるのに、病院の機能分化が進んだ今、自分で最後まで診ることは難しい。手術だけでなく緩和ケアも、診断からターミナルまで、責任を持って担いたいと考えていた。

自宅のある富山県からは遠距離。単身赴任となったが、もともと医局人事による転勤でも単身赴任を続けていたためネックにはならなかった。院内にはスタッフが24時間利用できる温泉大浴場があり、食事は3食、ビュッフェ形式の料理が提供される。

単身赴任でも全く困らない環境だ。「医局が個室で、各医師に1部屋ずつ割り当てられているのも気に入った」。

病院の経営方針などが決め手となって転職したのは、最近入職した他の医師たちも同様だ。「入職する前に経営者の話を聞いて、『この地域で医療を完結させなければならない』という強い意思を感じた」と語るのは、慶應義塾大学産婦人科出身の玉田裕氏。順天堂大学出身で血液内科の森甚一氏は、「いわき市に血液内科医が

少なく、自分たちで新たに血液内科を立ち上げるといってやりがいを感じた」と語る。両氏とも、東京都内の勤務先からの転職だ。

消化器内科医が来てくれれば…

横山氏が実際に働いてみて、とりわけ印象深かったのは、看護婦などのスタッフの協力的な姿勢だという。「こちらが「クリティカルパスを作ろう」などと言うと、すぐ対応してくれる。別に相手が「医者だから」というわけではなく、職員同士で助け合う雰囲気がある」。

診療面では、名誉院長の江尻氏とともに胃癌や大腸癌、乳癌、胆石症などの手術を月10件ほど手掛けてきた。4月に外科医が1人加わったため、さらに増やせる余地もあるが、病院全体で見るとまだ医師が足りず、難しい部分もあるという。

例えば、常勤の消化器内科医がいなかったため、内視鏡検査の件数に限りがあり、自院の外来患者から胃癌や大腸癌などを拾い上げて手術につなげることが難しい。また、乳癌の乳房温存手術は、放射線治療を実施できる医師がいなかったため手掛けていない。「手術だけこちらで行い、術後の放射線治療は他院に紹介する手もあるが、それなら初めから放射線治療ができる病院に紹介した方がいい」。

もともと、病院が医師の増員や設備投資に積極的な姿勢を見せているため、そこはあまり心配していない。「いろいろな制約がある中、人材を自分たちで育てつつ、地域ぐるみでいわきの医療を盛り上げていこうという熱意を感じる」。いずれは家族を呼び寄せてこの地に腰を落着け、「いわきの医療を盛り上げる」役割を継続的に果たしていく心積もりだ。



常盤病院院長の新村浩明氏（左から2人目）と、昨年に開入職した常勤医たち（左端：婦人科の玉田裕氏、左から3人目：横山貴信氏、右端：血液内科の森甚一氏）。